

# 日本 IVR 学会 国際交流促進制度 CIRSE 2010 参加印象記

兵庫医科大学 放射線科 山本 聡

IVR学会国際交流促進制度の援助をいただき、2010年10月2日から6日までバレンシア(スペイン)で開催された、CIRSE 2010に参加させていただきました。私自身は2002年ルツェルン(スイス)、2003年アンタルヤ(トルコ)、2004年バルセロナ(スペイン)以来の参加でした。当時は参加者もそれほど多くなかったように記憶していますが、今回はこれまで私が持っていたCIRSEのイメージとは全く異なり、非常に規模の大きな熱気あふれる学会に変貌していました。Workshopやhands-on workshopも充実しており、教育を重視する姿勢も強く感じました。また機器展示会場の盛況ぶりは、世界的不況の影響をまったく感じさせないもので、日本で認可されていないものも数多く、興味を持って見ることができました。会場でのディスカッションも盛んで、国際学会に参加するといつも演者(特に欧米人)のプレゼンテーションの巧みさに感心し、自分の未熟さを痛感します。国際学会の参加は、最新の知見に触れるだけでなく、プレゼンテーションの方法を学ぶ絶好の機会でもあります。ぜひ日本の若いIVR医の先生も積極的に参加されると良いと思います。

参加者は5,600人を超えたようで、日本からも多くの先生が遠路出席されていました。会場はバレンシア郊外にあり、学会が用意したシャトルバスを利用するか、地下鉄と路面電車を乗り継いで通いましたが、車窓を眺めながらの往来も異国情緒を感じることができ楽しいものでした。バレンシアの温暖な気候(というより少し暑かったですが)、フレンドリーな人々、美味しい食事とワインにすっかり魅了され、大変有意義な日々を過ごすことができました。このような機会をいただきましたことを心より感謝致します。以下に印象に残った講演・発表を紹介させていただきます。

**(Special Session) Be involved: renal artery denervation may dramatically influence management of patients with hypertension. (M. Sapoval: France)**

高血圧患者の10~15%は治療抵抗性といわれる。近年、従来の薬物治療に替わる方法として、腎動脈除神経術の有用性が報告されている。腎動脈の交感神経が血圧調節の役割を担っていることから、両側腎動脈に挿入したカテーテルを通し、ラジオ波を用いてこ

の神経を焼灼するものである。Krumらのチームが、45症例(平均血圧177/101±20mmHg)に対し除神経術を施行したところ、平均で-14/-10mmHg(1ヵ月後)、-27/-17mmHg(12ヵ月後)の血圧低下を得ることができた。現在110例でのrandomized studyが進行中であり、その結果が待ち望まれているところである。もしこの結果、本治療法が承認されれば血管内治療領域において多くの需要が生まれる可能性があり、腎動脈除神経術は将来的に高血圧治療の主要な役割を果たすかもしれない。(参考文献: Krum H. et al. Catheter based renal sympathetic denervation for resistant hypertension: a multicenter safety and proof-of-principle cohort study. Lancet 2009; 373: 1275-1281)

**1202.2 Prospective, phase II study of chemoembolization with drug eluting beads for hepatic neuroendocrine metastases: interim analysis. (D. Rayes: USA)**

神経内分泌腫瘍の肝転移に対し、Doxorubicin eluting beads (DEBs)を用いたTACEを行った30例の中間解析。対象は基準を満たし(Child-Pugh: A-B, ECOG: 0-1, 未治療)、かつ中間解析可能であった10例。治療1ヵ月後にMRIで評価した。結果: DEB-TACEは10例全例で成功(22病変)、grade 3のtoxicityとして高血糖3例、腹痛3例、倦怠感1例、ALT上昇1例であった。Grade 2のtoxicityとしてbilomaが2例にみられた。1ヵ月後のfollow up MRIにて平均7%の縮小(P=0.03)を認めた。RECISTを用いた評価ではPR 1例、SDが8例



学会会場にて  
左から金崎先生(滋賀医大)、高田先生(兵庫医大)、筆者、西田先生(大阪市大)

であった。EASLを用いた評価では、7例がobjective tumor response、2例がSDであった。中間解析の結果では、NETに対するDEBs-TACEの有効性が示された。

#### 1202.3 Precision V randomized trial: liver, gastrointestinal and cardiac toxicity in intermediate hepatocellular carcinoma (HCC) treated with PRECISION TACE with drug-eluting beads. (T.J Vogl: Germany)

Intermediate stageのHCCに対する、DC beadsを用いたTACEとconventional TACEとの毒性に関する比較試験(pro prospective, randomized, multicenter study)。212例(男性185例、女性27例、平均67歳)がエントリーされ、多くはadvanced stageであった。結果:PRECISION TACEは安全で、重篤な肝や心毒性は有意にDC-Beads群で低かった。

#### 1203.3 STAG trial: a multicenter randomized clinical trial comparing angioplasty and stenting for the treatment of iliac occlusion. (S.D. Goode: UK)

Symptomatic iliac occlusionに対するangioplastyとstentingとの比較試験。(Prospective, randomized, multicenter

study) 118例がエントリーされ、61例にangioplasty、57例にstentingが施行された。結果:PTA群でprimary failureが多く(24 vs. 5.3%,  $p=0.004$ )、また合併症も多くみられた(15 vs. 4%)が、2年間のclinical outcomesおよび血行動態には有意差はなかった。

#### 1204.3 TIPS: 10-year experience in the covered stent graft era. (F. Fanelli: Italy)

1999年以降e-PTFE covered stentを用いて施行したTIPS 216例の報告。内訳は難治性腹水122例、出血83例、Budd-Chiari syndrome 11例。全例で技術的成功を得た。Primary patency rateは93.2%、secondary patency rateは98.8%であった。肝性脳症が49/216(22.7%)に発症。これらに対してはshunt reductionを行い症状は改善した。e-PTFE covered stentは良好な長期成績を保証できる。

#### 1204.5 Autologous pancreatic islet cell autotransplantation following total pancreatectomy: a modified approach. (R. Uflacker: USA)

膵切除後の糖尿病を改善させる目的で、切除時に採取したislet cellを径カテーテル的に門脈内に投与する治療に関する報告。31症例(23例が女性)に対

し施行。30例は全膵切除、1例が遠位膵切除。取り出されたislet cellは術後早期に投与開始(平均208分後)し、平均48.3分かけて注入された。移植に関連する重篤な合併症や死亡例はなかった。インスリン投与量は術後1日目の平均34.35単位から退院日には平均18.9単位(～45%減少)に減量できた。2ヵ月のfollow upでは33%の症例でインスリン投与の必要がなかった。本法は安全に施行することができ、術後糖尿病を改善させうる可能性がある。

#### 1209.3 Prostatic arterial embolization to treat benign prostatic hyperplasia. (J.M. Pisc: Portugal)

症候性前立腺肥大症(BPH)に対する動脈塞栓術についての報告。20症例(平均年齢74.1歳)のBPHに対し200 $\mu$ mのPVAを用いPAE施行。16名は術後6～8時間後に退院、4名は翌朝退院した。結果:技術的成功率は95%、2例は片側のみのPAE、1例はPAEに起因する疼痛がみられた。前立腺体積は平均27.2%減少し、QOLやIPSS(international prostate symptom score)も改善した。重大な合併症はなく、全例とも性機能の低下はみられず症状のコントロールも良好であった。